

「最初の10年」卒業生の活躍

環境生態学的な仕事をしています

環境生態学科 第1期卒業生
北村 雅彦

1. こんな仕事をしています

1995年に1期生として環境生態学科に入学、環境動態学専攻に進学し2001年に修士課程を修了し、大阪の動植物の調査を専門とする建設コンサルタントに入社しました。生物調査は学生時代の直接の専門ではありませんでしたが、自然環境の保全に関心があったため自分の好きな分野の仕事に就くことができたと思います。今年、入社10年目を迎えます。

仕事は開発事業に際して実施される環境アセスメントなどの環境調査において、生物相を調査し、絶滅危惧種の保全対策を検討することが主な業務で、自然環境の保全に関する計画業務も行っています。1年の半分は野外で昆虫採集や魚採りなどをし、半分は事務所で報告書を書く日々を過ごしています。

<携わった主な業務>

- 道路建設、河川改修、宅地開発に伴う生物相調査と絶滅危惧種の保全対策の検討
- 河川の生物相を調査する「河川水辺の国勢調査」
- 里山林整備計画の立案
- GISを用いた絶滅危惧種や外来生物のデータベース作成
- 昆虫館の催物運営、市民によるホタル調査
- 生物多様性保全の啓発冊子作成



2. 大学と犬上川と私

学生時代は大学のそばを流れる犬上川で計画されていた河川改修に関心を持ち、サークルで犬上川の自然、歴史を調べ、観察会、ごみ拾い、シンポジウムなどを開催しました。研究でも大気水圏研究室に所属し、倉茂先生や退官された伏見先生の指導を受け、犬上川に生息する絶滅危惧種の淡水魚「ハリヨ」の生息環境として大切な「河川の湧水」について研究しました。

河川改修を行う上で、治水以外にも自然、歴史、文化などの情報を工事関係者や地元住民と共有し、犬上川らしさの保全と治水安全性の向上のバランスが取れた整備になるように、何か提案したいという強い思いで研究やサークル活動に取り組んでいました。犬上川に関する取り組みは、複数の視点で問題を検討することの大切さを学び、現在の仕事にも大変役に立っています。

就職した現在も、「犬上川を豊かにする会」という任意団体に所属し、細々とですがアユ・ビワマスの観察会や、河川整備に関する地元との協議・工事事務所への提案などの活動を行っています。

3. 大学で学んだことと仕事で学んだこと

大学の授業は、環境科学部以外の授業も受講できたのでいろいろな分野に触れるきっかけができました。地域で地元の方と話をする際には生物のこと以外にも、歴史や文化的な側面にも配慮する必要があります。絶滅危惧種の保全対策を検討する際には、法律や土木工学的な知識も無いと、具体的な解決方法を見出すことは困難です。それぞれ専門ではありませんが、授業で聞いた内容を思い返して文献を調べたり、専門家の話を伺うことができます。

研究室では自分のやりたいテーマをさせていただき、ひとまず納得の行くまで研究することができました。直接ご指導いただいた倉茂先生には、科学的なデータの取り方や結果をとりまとめわかりやすく説明することの大切さを厳しくご指導いただきました。誤解の無い文章を書くようにすることを何度も叩き込まれましたので、今でもメールの文章が長くなってしまいがちで、トラウマです(笑)。

仕事では研究とは違い、限られた時間の中で効率よく調査し、有効な提案を行う必要があります。いまでも要領が悪いですが、実務をこなす中で多くのことを学びました。最近は絶滅のリスクを定量的に評価する方法に関心があり、大学時代に統計学やモデリング、個体群生態学などをもっと勉強しておけばよかったと後悔しています。

弊社では調査に学生のお手伝いをお願いすること

もあり、今でも大学院に在籍されている中西君をはじめとする滋賀県立大学の学生の皆様には大変お世話になっています。自然環境の調査は地味作業が多

いですが、動植物調査業の実務に触れるよい機会にもなると思いますので、関心のある方はお手伝いいただけると助かります。

「自給力」を基礎教養に

環境生態学科 第1期卒業生

村上 悟

(特定非営利活動法人 碧いびわ湖代表理事)

はじめに

滋賀県立大学が開学し、私たち一期生が環境科学部に入学してからもうすぐ15年が経つ。この間に、環境問題への世論は高まり、法の整備や産業界の対応も進んだ。しかし、私たちの社会が持続可能な姿になった、と実感するには至っていない。

それは、環境問題の原因である私たちの「暮らし」や「仕事」の実態が、根本的な変化を遂げていないからではないだろうか。

だとすれば、環境科学部の卒業生には、未来の「暮らし」や「仕事」を具体的に描く想像力と、それを形にする創造力が求められよう。

そんな学生が育つ学部であるための一案として「自給力」を環境科学部の基礎教養に位置づけることを、私から提案させていただきたい。

私の現在—経済活動で地域社会を変える事業型NPO

私は2009年7月から、「NPO法人碧いびわ湖」の代表理事を務めている。このNPOは、約20年前に設立された「滋賀県環境生活協同組合」の事業を引き継いで設立されたNPOだ。「買い物」と「暮らし」の変革を通じて持続可能な社会をつくることを目指し、会員活動、リサイクル事業、環境商品供給事業、住宅リフォーム事業等を行っており、私も含め3人の常勤スタッフを抱えている。

原点は、約30年前にせっけん運動から生まれた、廃食油のリサイクルせっけん事業。想いの共感の中から、持続可能な物とお金の流れをつくり出し、それを事業として継続していくのが、碧いびわ湖のスタイルだ。

(詳細は碧いびわ湖のブログをご覧ください)

私の転機—自室のセルフリフォームの経験

私は、社会は誰かに創ってもらうものではなく、自分たちで創り上げるものだと考えている。その感覚の原点となったのは、27才で挑んだ自室のセルフリフォームだ。

私は滋賀県立大学で修士課程を修了したあと、茨城県のNPO法人で3年間勤務し、市民主導による霞ヶ浦の自然再生プロジェクトに携わった。しかし、まとまった成果を残すことはできないまま、地元之余呉町（現長浜市）に戻った。

実家に戻った私はまず、自室の六畳間をリフォームした。その際、私がプロに任せず、自らの手で改装することを決意したのが転機となった。

大工さんに道具を借り、材料を分けてもらった。床はフローリングを無垢の杉材に張り替え、壁はビニルクロスの上から杉板を貼った。建具屋さんにも教えを請い、ドアやクローゼットも作った。建築はまったくの無経験だったが、意外に難なく完成できた。

部屋が完成した時、部屋の見え方が劇的に変わった。それまでも自分が寝起きしていた部屋だったのだが、「ここは自分の居場所だ!」という本能的な実感が沸き、桁違いに居心地がよくなったのである。

自信と限界—米の自給と自営への挑戦

それまでの私は、自分が求める環境を得るためには、世界のすべてを変えないといけないような錯覚に囚われていた。しかし、リフォームの経験を通じて私は、人に頼らずとも、自分で自分を満たすことができるのが案外あるのではないかと、思えるようになった。

勢いづいた私はその翌年、米作りも始めた。苗づくりとモミすりは知人の世話になったが、田植え、草取り、稲刈り、脱穀はすべて手作業でやった。そして、自分が一年に食べるだけの米（約60kg）を得ることは、想像していたよりもずっと少ない土地（約2a）と労力でできることを知った。

そうして2年半の大工見習いを経たあと、今度は経済的な自給（自立）を目指して、自営業にチャレンジした。まちづくりのコンサルティングを事業とし、地元の観光協会や商工会でお仕事をさせていただいた。しかし、一人でできる仕事には限りがあることを痛感し、事業は一年で終えた。そして2008年秋、現NPOの前身、滋賀県環境生協の職員となり、今に至る。

自給力のある個人が自給力の高い社会を創る

私は、持続可能な社会、とは、限られた地域の

中、限られた時限の中で（将来世代につけを回さずに）自給する社会だと考えている。

仮に「自給力」を「自分（たち）のニーズを定量的に把握し、それを満たす術を持っていること」と定義するならば、社会の自給力は、社会を構成する個人の自給力の総和にあると言えよう。

だから、環境科学部の学生には、自給力を高める経験を重ねてほしいと思う。そのことを通じて、想像力と創造力を身につけた学生は、社会の自給力に寄与すると共に、自らの人生に自信と安心と希望を

抱くことができるようになるだろう。

たとえば、アパートに暮らす代わりに大学周辺の空き家を自らリフォームし、空き農地を耕して暮らしてみてもはどうだろう。もし米が余分に生産できたら、生協食堂で利用してはどうだろう。

建てる、耕す、稼ぐ…そんな土臭い学生像は、一般的な学生像とは違うかもしれない。しかし「キャンパスは琵琶湖、テキストは人間」「人が育つ大学」という本学のコンセプトには案外、似合っているのではないだろうか。

高等学校の現場から思うこと

環境生態学科 第5期卒業生
岩田 拓朗
(岐阜県立郡上北高等学校 教諭)

1 大学卒業から現在まで

はやいもので大学を卒業してから、7年の歳月が流れようとしている。卒業して1年後に臨時採用という形で初めて高等学校の教壇に立ち、その学校で1年、その後別の学校で2年間臨時採用というかたちで勤務した。その後岐阜県の教員採用試験に合格し、正採用というかたちで現在の郡上北高等学校に配属されて今年で3年になる。

教員として働きだすまでは、教員というのは授業だけ行っていればいいと気楽に考えていたのだが、実際は部活や校務分掌といった授業以外の仕事が多くあり、忙しい毎日を送っている。また昨年からは担任を任されるようになり、手のかかる生徒たちに振り回される毎日である。

2 現在の私の仕事

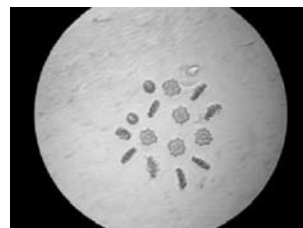
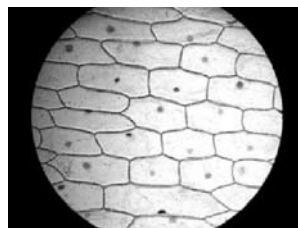
現在私は、授業以外に2年生の担任、バレーボール部の顧問、進路指導部での3年生への進路指導などを任されている。授業では、主に「理科総合B」と「生物Ⅰ・Ⅱ」という教科を任されている。授業を行う際には、いかに生徒の興味・関心をひきだす授業を行えるかといったことに力をいれて取り組んでいる。ここでは私の授業について、いくつか紹介させていただきたい。

臨時採用のときから数えると、私にとって現在の職場は3校目の学校であるが、学校が変わると生徒の様子や、卒業後の進路も大きく異なる。そのため、それぞれの学校や生徒にあった授業を行うことを心がけなくてはならない。恥ずかしながら、本校

には、1時間の授業に集中できない生徒も多くおり、どうしても私語や他ごとが目立つ。そのため、最近は積極的に机間指導を行うことを心掛けている。机間指導といっても、内容が理解できたのかを確認するだけではなく、教科書を開かせる、ノートを取らせるなどといったごく当たり前の指導を根気よく続けてきた。はじめのうちは、席までいかないとノートや教科書を開けてくれなかったのだが、続けていくうちに、前から呼び掛けるだけでも、生徒はノートや教科書を開くようになり、授業に向かう姿勢が少しずつ良くなっているように感じている。

また、現在私が担当している生物Ⅰの授業は、毎回生物実験室で行っている。実験室には、モニター用のテレビが2台あり、今年度はこのテレビを利用して授業展開を行った。あらかじめデジタルカメラで撮影しておいた教科書の挿絵や写真、顕微鏡の写真などをテレビに映して説明をするようにした。実験などを行う際にも、予備実験をした様子を撮影した動画を映しながら、実験の内容を説明するようにした。

また、私のデジタルカメラは顕微鏡写真を容易に撮影できるため、生徒が作ったプレパラートを撮影してモニターに映すと、生徒たちもよろこんでいた。先日行った「イワシの消化器官内容物の観察」では多くの生徒が、自分が見つけたものを撮影してほしいと要求してきた。



↑生徒の作ったプレパラート
(タマネギの表皮、淡水の植物プランクトン)

3 環境教育と環境科学部について

授業では、その単元に関する環境問題について

取り上げることも心がけている。環境科学部を卒業したということもあり、できるだけ多くの生徒にこれらの問題を知ってほしいと考えるためである。

授業を行ってみると、思った以上に生徒がそれらの問題について認知していないことに気がつく。環境問題の具体的な解決策というのはなかなか難しいのだが、まずはそれらの問題を認識しないと始まらない。今後も積極的に授業に取り入れていけたらよいと考えている。

恥ずかしながら、私は大学時代にはそれほど熱心に勉強をしていなかったのだが、大学時代に受けた講義の内容や、フィールドワークなどを通しての体験的な学習、卒業論文の執筆などの経験が授業を行う際に役に立っていると感じている。特に卒業論文では、琵琶湖におけるケイ素の分布について調べたのだが、サンプリングから実験、データ処理、執筆

といった経験を通じて、実際の環境の状態を把握するための調査がどういった手段で、どのくらいの時間をかけて行われているのかということを経験として知ることができた。これらの経験は、特に環境問題を取り上げた授業を行う際に役に立っている。

滋賀県立大学の環境科学部の教育は、講義を基礎として、フィールドワークや学生実験、卒業論文などで、実際にいろいろな経験をしながら講義で学んだことを体験として学習している。私が環境科学部の卒業生として思うことは、それらの教育を通じて、多くの学生が環境問題という難しい問題に真剣に向き合い、またそこからより多くの人たちが環境問題を意識して生活できるようになってくれればとよいということである。今後も環境科学部には、少しでもそのような学生が育つような教育を、継続して行ってもらいたいと考える。

環境問題を学ぶ

～環境科学部と環境学習～

環境生態学科 第5期卒業生
吉田 晴子

1999年4月に私が滋賀県立大学に入学した時、大学は初めての卒業生である1期生を送りだしたばかりでした。それから10年。私にとっても、環境科学部を志望し、受験勉強をして、入学してから10年ということになります。奇しくも、私が勤務している「三重県環境学習情報センター」も、1999年8月に開館し、10年が経過しました。

三重県環境学習情報センターは、三重県における環境学習・活動の拠点施設です。私はそこで、環境学習推進員という仕事をしています。三重県内各地に出向き、総合的な学習の時間や公民館事業において環境学習の講座を行います。講座を行う対象は、小中学生や高校生はもちろん、幼稚園児だったり、地域の老人クラブであったり、とまさに老若男女です。講座の内容も、地球温暖化やごみ問題、大気や水の汚染についてなど、こちらも多種多様です。環境問題は日々変化していくので、私が環境科学部で学んだ知識だけでは対応しきれません。仕事に就いてから改めて学んだこともたくさんあります。

さて、環境科学も環境学習も、どちらも簡単に言えば、環境問題について学ぶことです。その目的は、ひと言で言えば「環境問題を解決すること」です。その中でも、環境科学は「環境の中で (in)、環境について (about)」学ぶ、つまり環境問題を

明らかにすることが目標だと思います。一方、環境学習は「環境のために (for)」学ぶ、問題の解決に向けて、行動することが目標です。両者の目的は同じでも、目標、目指しているところは少し違うと感じます。

ただ、環境科学部は大学という教育機関であるので、環境学習の目標も持ち合わせています。つまり、環境問題の解決に向けて行動できる人を育てることは、大きな目標の1つではないでしょうか。そしてそれは、環境学習という仕事に携わっている私の目指すところでもあります。では、環境問題の解決に向けて行動できる人には、どんな力が必要なのでしょう。答えは1つではないと思いますが、まず私が必要だと思うのは、自分と環境との「つながりに気づく力」です。この力を、私は環境科学で身につけ、今はその力を身につけられる場を提供する仕事をしている、と言えます。

前述のように、私はいろいろな人を対象に、幅広く環境学習の講座を行っています。しかしどんな講座でも、知識を伝えるというより、自分と環境とのつながりに気づいてもらうことが大切だと考えています。日常生活においては、自分と自分以外（環境）とのつながりを目にする機会が減っています。汚れた水を排水溝に流してしまえば、その後水がどこを流れていくか、目にすることはほとんどありません。ごみ置き場にごみを出せば、いつの間にか消えています。目にしなくなった部分については、意識することも少なくなります。そこで大変な問題が起きていても、それが自分に関係していることだとは思いません。自分と環境とのつながりに気づくこ

とで、環境問題が自分の問題になり、解決への行動につながっていきます。講座では、自分で考えたり、周りの人と話し合いをしたりして答えを導いていく参加体験型学習の手法もよく用います。

一方で、それらは私が環境科学部で身に付けた「つながりに気づく力」とは、対象や手法が少し違います。環境フィールドワークと言った授業や卒業研究などでは、生態系におけるつながりや、過去と現在・未来といった時間的なつながりについて観ていたように思います。また手法も、フィールドに出て、サンプリングをし、実験や分析をすると言った科学的な手法でした。私は環境科学部で身に付けた「つながりに気づく力」を、そのまま使っているのではなく、対象や手法を変えて、仕事に活かしてい

ることになります。「百聞は一見にしかず」と似たような言葉ですが、「体験したことは、わかる。発見したことは、できる」という言葉があります。体験して理解するだけでなく、発見する過程を重視していた環境科学部での経験が、今の仕事につながっていると思います。

環境学習に限らず教育分野は、今すぐに効果を発揮するというよりも、5年、10年というやや長期的な視野でみたとき効果を発揮するものと言われます。環境科学部も環境学習情報センターも、10年前に思い描いた効果が表れているのでしょうか。その検証は簡単ではありません。でも、環境科学部を卒業した私個人で言えば、10年前に自分が思い描いた自分に、それなりに近づけたのかな、と思います。

社会の需要

環境生態学科 第6期卒業生
苗田 千尋

本学の環境科学研究科を修了して、5回目の春になる。計量証明業に就職して5年目。これまで何度も大学での経験や思い出を振り返っては、前を向いて歩いてきた。大学での4年間と大学院での2年間は、私の中で確かな土台となって、今を支えてくれている。

在学中は、陸水中の溶存有機物の研究を化学的アプローチで行っていた。現在は、簡単に言うと、『毒』と言われるものの分析法開発、環境試料中濃度測定を行いながら、大学や研究所との様々な共同研究に参加させていただいている。まだまだ分からないことだらけであるが、最近では漸く、自分で考えながら仕事を進め、結果に対する考察や新たな提案が出来るようになった。改めて、「考えることは面白いことだ」と悟った。

本稿は、教員を目指したことがない私の、「教育」についての一考察である。社会人になってから考えた、『これからの滋賀県立大学環境科学部の教育』について記したい。

「環境科学はお金にならない」ということは、就職活動の時に思い知った。人は人である限り、人に対する有害無害・有益無益が、社会活動の中心になる。環境科学という学問は人が中心ではない。自然現象そのものを科学的に解明したり、他種の生態を明らかにしたり、ある化学種の動態を明らかにしたり……。環境科学において人は生物種の一つに過ぎない。私は、「人が中心ではない環境」という、そ

の学問の考え方が好きだった。

環境科学という分野は、残念ながら社会的に見て必要と判断され難い分野であると思う。決して不要なのではないにも関わらず、「それをして何になるの？」という疑問を持たれ易い。一般の人からのこのような質問を受けた時、自身の専門分野、あるいは研究について明確な回答をお持ちだろうか。本稿で、問題提起をさせていただきたい。これに答えるためには、自分の専門や研究についての、社会的位置づけが明らかにされていなければならないだろう。

これから滋賀県立大学環境科学部は、社会との接点をより多く持つべきだ。多くの大学は、滋賀県立大学同様、孤立しかけているように思う。実社会はどのような現状にあり、何が必要とされているのか？を知ってこそ、また、どのようにしたら自身の専門や研究を社会に還元できるのか？を考えてこそ、大学は社会の一部となることができるのではないかな。授業においても環境科学という学問を、社会的意味合いを織り交ぜて教えていくことが出来れば、一般企業で環境科学をもとに活躍する卒業生がもっと増えるはずだ。

冒頭でも記したように、私は環境科学を6年間教わった。全て貴重な知識であり、学んでいて面白かった。しかし、社会人になってから、ダイレクトに使えた環境科学の知識は数%程度だと思う。お金にならない環境科学出身の私が、利益を生まなければならない一般企業で勤められている理由は、何故か？それは、事象を多面的に見ることができ、問題を発見・追求し、自分の考えを提案できるからだと思う。これは、滋賀県立大学において、「人が中心ではない」環境科学を学ぶことによって出来るようになったことだ。

大学は、教科書だけを使ったマニュアル的教育をしてはいけない。社会では当然ながら、教科書に無い問題が発生する。解答は自分で見つけるしかない。そういった時に、どこから手を着ければよいか考えるための、知恵や工夫を教わるのが大学だ。教わる知識を覚えるのではなく納得し、応用するための知恵と工夫を教わるのだ。

某有名大学が新入生の初年度教育に「社会常識」を実施するというニュースを拝見した。これは果た

して、社会から最高学府への需要であろうか？大学は、家庭から子供を預かり教育し就職させる場ではない。また学生は、就職先や就職率で大学を選ぶべきではない。滋賀県立大学は、自分の希望をもとに、自分の可能性実現のために、人間としての特性を磨ける場であってほしい。そして、社会との接点を通して、教員も学生も、社会の需要に対して自分なりの考えを持ち、敏感に反応する大学であってほしい。そう切に願う。

出会いが生み出す財産

環境政策・計画学科 第2期卒業生
大西 弥恵子(旧姓 馬場)

私は大学を卒業後、滋賀県を離れ映像制作の会社に入社しました。そしてディレクターとして約8年間ビデオ制作に携わっておりました。主な仕事内容は、クライアントから目的や要望を聞きだし、それを活かした演出方法を考え、スタッフを率いて撮影に臨むことです。

仕事の内容自体は、環境問題を取り扱う大学の授業と直接的な関係はありませんでした。しかし四年間の講義や卒論制作によって、物事を様々な視点から捉えることや、問題に対して能動的かつ積極的に取り組んでいく力を身につけることが出来ました。これらは、色々な意見をまとめて撮影の方針を決定したり、問題が発生したときに周囲の力を借りながら解決方法を見出すことなど、ディレクターつまり撮影チームのリーダーとして必要とされる力を養うのに非常に役立つものでした。また、大学時代に「ものをつくる」ことに興味を抱き、その結果映像制作という仕事に就いたのですが、その経緯には友人との付き合いで得た数々の刺激が元になっています。10代後半から20代前半という、人生の中で最も多くのことを考えたり感じたりする時期に、学科内の交流や、学内にとどまらず地域も巻き込んだサークル活動、またアルバイトなどで多くの人々に

出会ったことが、これまでの私を形作る大切な財産になっています。

さらに、そのような出会いから生まれた友人の紹介で、数年前に彦根市に住む男性と知り合い、結婚することになりました。そして映像制作の会社を退職し、再び彦根市で暮らすようになりました。

その後、滋賀県立大学で勤務することが決まり、現在は環境科学部の実習助手として働いています。在学中にお世話になった先生方にも再びお会いし、楽しかったキャンパスライフを思い出しながら、毎日仕事に励み充実した日々を送っています。

私は大学に入学するまで、大学教育と言えば広い教室で大勢の学生に対して講義を行うものだというイメージを持っており、「先生 対 学生」は「一人 対 大勢」という関係に過ぎないと思っていました。しかし、実際には少人数で行う講義やゼミ、そして複数の先生で担当する授業が存在し、先生方は一人一人に対して熱心に指導をして下さったのです。さらに現在、私は大学で勤務することにより、再び滋賀県立大学の教育に触れることになりました。学生の時とは違う立場で、いわば「教育の裏側」を覗くことになったのです。そこでは、学生時代に私自身が感じていた以上に、先生方が学生一人一人を注意深く見守りながら、熱心な指導が行われていました。このような教育体制であるからこそ、私のように授業内容とは異なる分野で働くことになった者にも、仕事をする上で役立つことが多く学べるのではないかと思います。

自分探しの途中の人

環境政策・計画学科 第2期卒業生
西尾 好未

早いもので、2010年3月で卒業から8年が経ちます。私の友人には卒業後、自分の夢を追いかけ希望の仕事に就いた人、卒業してすぐに親になった人、ひとつの会社で必死にキャリアを積んでいる人、中にはまだ自分探しの途中の人もあります。今回、私の在学中、そして卒業後の経験、いまの「思い」をお話することで滋賀県立大学の在学生、そして卒業生、関係者の皆様の記憶に残る卒業生の一人になれば、こんなに嬉しいことはありません。

私は卒業後、いくつかの仕事を経験しており、現在勤務している民間の会社（分析機器メーカー）で4つ目になります。職種は様々ですが、一貫して心がけ、自身のモットーというか、私の心にあるものとして「現場を知る」ことを大事にしています。

それは、大学4年生の秋の出来事から生まれた思いです。ひょんなきっかけからカリフォルニア（米国）に行く機会を得た私は、自分が英語が分からないことに目をつむって、勢いで渡米しました。たった一週間ほどの滞在でしたが、それでも今でも忘れられないことが二つあります。

ひとつは、「バケツから無限の砂をまいたような」星空を見たことです。あんな星空をそれまでに見たことはなく、今でも目を閉じると思い浮かぶほどです。その星空は、そこにいた人たちの言葉や専門、そして国の違いを超えて同じ感動に包んでいました。それは「その場に私がいた」から得られたものだと思います。

二つ目は、訪れた湖の周辺の景色、感じた空気、圧倒された大きさが、後に私の知識習得の助けとなった事実です。私は帰国後、その湖の歴史と保護のための住民運動をまとめたドキュメント本を約一年ほどをかけて翻訳する機会がありました。今でも自信はありませんが、当時は今以上に英語が出来ず、翻訳作業は本当に大変なものでした。しかし、訪問した時に撮影した写真や、感じた距離感、湖水（塩湖でしたので）のしょっぱさ、見せてもらったプランクトンや顔にまわりついた虫の多さ、そんな「その場に私がいた」からこそ得られた経験が、翻訳した言葉を生きた言葉に変えることが出来たと信じています。

振り返ってみると、私が在学していた当時の県立大の講義は、そんなその場にいることの大切さを知

る講義が多かったような気がします。特にフィールドワークでは、テーマごとに「現地」に赴き、地元の方の生きた言葉を聞き、記録を探し、記憶を言葉にすることを学びました。そのフィールドワークでの経験が、その後思いがけず「現場を知る」という機会を得たときに、自然に「自分は何をすべきか、何を感じるべきか」というのを思い出させてくれているのだと気付きました。でも本当はその講義を受けたときに分かってほしいことだったんだけどな、と当時の先生からお叱りを受けてしまいそうですね。そんな経験から、卒業後に勤めたりサイクルコンサルタントの会社では机上の勉強よりも、実際に廃棄物を収集し、それを再生しているお客様先に行くことを大事にしましたし、廃棄物のサンプルを実際に見たり触ったりして、そこから得た感覚を自分の言葉に変える努力もしました。

またその後に勤めた財団でも、自身で徹底したのは、部屋に閉じこもった会議だけを行うのではなく、大人も子供も、専門家も一般の人も、そして国も関係なく、より多くの人が「見る」こと「感じる」ことが出来るようなプログラムを企画し実行したことです。

今勤めている会社でも、自身の在学時の専門とは全く異なり入社当初は混乱しましたが、それでも大切にしていることは同じです。それは、実際に装置に触れること、そして出来るだけ多くのお客様に会い、その声を大事にすること。つまり私たちの装置を使っていただいているその現場をよく知ることです。

お客様先を訪問して、私たちの装置がどのような環境にあり、何のためにどれくらいの頻度で使用されているか、を自分の目で確かめ、また社内の勉強会では、ある業界の生産プロセスを学ぶ機会があり、生産プロセス全体で、どの工程に私たちの製品が使用され、どんな精度を求められているのか、また私たちの製品にラインナップがない分析機器はどんなことを分析する装置なのかを知りました。これからも大切にしたいと思っています。

文頭に書いた「自分探しの途中の人」というのは私も含むのかもしれませんが、でも「現場を知る」経験が私の新しい世界をつくり、常に私が「途中の人」になってしまうのだと思います。幸せなことですね。

そして「途中の人」でもいいんだ、と思える自身の礎になっているのが、滋賀県立大学での先生方からの教えであり、メッセージなのだと、確信しています。ご指導ありがとうございました。



ナクル湖（ケニア）

2005年にナイロビ（ケニア）で開催された第11回世界湖沼会議のフィールドツアーからの写真です。世界湖沼会議は、当時勤めていた財団が主催する、世界の湖沼環境保全をテーマとした国際会議です。私は主催団体の一人として会議に参加しました。写真ではお伝えできないので残念ですが、湖岸には130万羽（現地説明による）のフラミンゴがいて、湖岸に沿うように鮮やかなピンク色の帯ができていました。その帯は写真のように遠目に見るとピンク色に見えるのですが、実際のフラミンゴはもっと赤色に近いピンク色をしていました。なぜ写真にはピンク色で写っていたのか？それはそのフラミンゴの大群の中に、それに負けないくらいの数の真っ白なペリカンがいたからです。湖岸に降りて、近づいてみて初めて分かった、自然の色の素晴らしさでした。



野積みされている廃棄物とそこから発生しているメタンガスの様子（カンボジア）

2005年当時勤めていた財団では国際協力研修を受託しており、私はその研修のカリキュラムコーディネーターをしていました。2002年に研修に参加したカンボジアの方を、帰国後の2005年に研修の講師の方と一緒に訪れ、その研修員が課題としていた現場を案内してもらった時に撮影したものです。担当していた研修事業をさらに充実させ、効果あるものにするためには、研修コーディネーターだった私が、研修員を取り囲む環境、研修員が解決しなければいけない課題・問題、それを「現場」として知ることが必要でした。写真では分からない、現場の臭い、ハエの多さ、自然発煙、ゴミ山の中を裸足で歩いて資源ゴミを探す子どもたちを実際に見て、私たち日本人が伝えられる「思い」や「技術」は何か、考えなければならない多くの課題をそこから学び、その経験をその後の研修カリキュラムの構成に役立てました。



学びたい分だけ学べる大学

環境政策・計画学科 第4期卒業生

山田 勇

(持続可能な松本平創造カンパニーわおん♪)

滋賀県立大学に入学したのは、1997年4月。小学6年生の頃から環境問題に関心を持ち、「いつか環境問題を解決したい」という夢を持ちながら中学、高校を過ごしていた。大学の進学先を探していたときに、「国公立で初めての環境科学部」というフレーズをみつけ、滋賀県立大学に関心を引きつけられた。「ここならば、間違いなく環境のことが学べるだろう」と信じて入学。

確かに講義の内容は環境に関することが多く、たくさん学ぶことができた。特に1年目からあったフィールドワークでは、地域と関わること、地域から学ぶことの大切さを学んだ。また、政治や法律、経済など幅の広い分野を学ぶことができたことは、まちづくりを進めていくうえでとても参考になっている。

しかしそれ以上に、同じような志を持った仲間がたくさん出会えたことが大きかった。環境関係のサークルに入って活躍している人、ちょうどCOP3の時期でもあったので、京都へ行き活動している人、学内でさまざまな新しいことに挑戦している人など多くの仲間から刺激を受けることができた。

特に1年目は、講義内容と仲間から受けた刺激がとても大きく、「自分も何かしなくては!」と強く感じた。そのときに、「環境の分野に関わりたのなら、海外やいろんな地域をみるのが重要だ」と先生が講義の中でおっしゃっており、中国への留学を決意した。

帰国後は、同期入学の仲間が受けている講義やゼミに参加することもでき、特に問題もなく復学できたことは非常にありがたいことだった。また、他の学科の講義を受けることもでき、4回生のときには12月から月の半分は東京で環境教育を実践していくための講座を受けながら、半分は卒業論文を進めていくという学生生活を送らせていただいた。これも「なぜこんな時期に!」と反対されることもなく、自分が学びたいと思ったときに学びたいことを学ぶことができたのはとても大きなことだった。

[地域活動と滋賀県立大学]

卒業後は、東京で受けていた講座の影響を大きく受け、環境教育をおこなう市民団体「環境学び舎

わのたね」を設立。自然体感や環境をテーマにしたワークショップなどの環境教育を実施してきた。その他にも2008年4月までは、滋賀県内で社会教育指導員や自然観察指導員として公共施設で働いていた。

その際に多くの滋賀県立大学の学生や卒業生にお世話になった。例えば、わのたねで子どもを対象にした1泊2日の竹細工キャンプを開催したときのこと。環境関係のサークルの学生が数名手伝いに来てくれて、どのような内容にするかを一緒に考えたり、竹に関するクイズを考えてくれたり、子どもたちが竹を切り倒すときや、ナタやノコギリ、ナイフを使って竹細工をする際に大ケガをしないように安全管理をしてくれた。



また、子どもに関わっている大人を集めて1泊2日の交流会を企画したときも、実行委員会に滋賀県立大学の卒業生がいて、一緒に1年間かけて企画をつくり県内外から約50名の方に参加していただき、大きなイベントを成功させることができた。他にも滋賀県内で活動をしていたときは、本当に滋賀県立大学の関係者と出会うことが多かった。NPOに関わりたいと考えている若者でネットワークをつくる際にも非常に多くの関係者がいた。

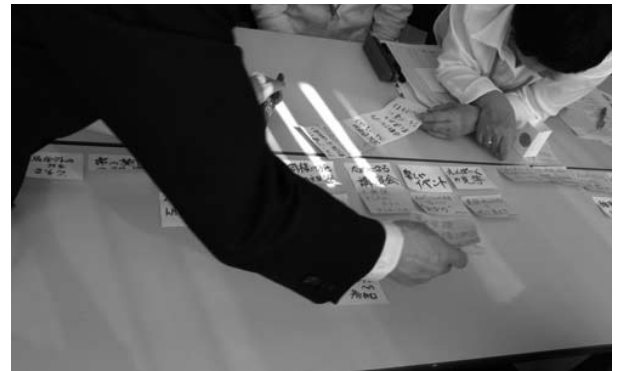
それだけ地域に根ざし、地域と関わりを持つことを大切にしている大学なのだと言えるだろう。今後さらに地域で活躍する人が増えることを期待したいし、滋賀県立大学の学生や卒業生がより活発に地域と関わることで、滋賀県全体が活性化するといっても過言ではないと感じている。

[ファシリテーターとして活躍できるように]

現在は、実家のある長野県塩尻市で「持続可能な松本平創造カンパニー わおん♪」という団体を立ち上げて仕事をしている。滋賀県にいたときと同様に環境教育もしているが、それ以外にも地域と深く関わり、市民と行政とが協働して地域の課題を解決し、よりよい地域づくりがいかに行けるか、そのシステムづくりを市民側から進めている。

滋賀県から引っ越す際に久しぶりに見つけた、合意形成技法のテキストを開いてみた。そこにはこんな文章が。「ややオーバーに言えば、この【合意形成の】技法（または考え方）を駆使して、あらゆる場の問題解決の指南役兼ファシリテーターになれることが、環境社会計画専攻出身者の特徴・資質である、と心得よ」

地域にはさまざまな課題があり、さまざまな人々がその課題に関わっている。全ての人々が満足することは非常に難しい。それでも、「どういうプロセスを経て合意に向かえばより多くの人々が満足できるのか」を考え続け、地域から求められるようなファシリテーターになっていきたいと思う。



授業の中から見えてきた 「環境」に対しての 自分自身との関わり

環境政策・計画学科 第4期卒業生
河村 賢造
(ドクター・オブ・ジ・アース株式会社 代表取締役)

先日、環境計画・政策学科の授業において御話をさせていただく機会を頂いた。本学科には、環境に関心を持った多くの学生がいるが、社会に出てからどのようにして環境と関わりあうか悩んでいる学生が多いように見受けられた。実際、私も環境というキーワードを基に就職活動を行ったが、それに直接的に関わる企業も多くない。ましてや、環境の部署を特定し、就職窓口を設けている企業はほとんどない。私自身もその悩んでいる中の一人であったが、在学中の授業の中でその関わり合いの重要なヒントが得られた。

ここからは、私自身が在学中にどのようにして、「環境」との関わり合いを見つけていったのかを紹介したい。中学時代から「環境」への関心があり、「地球の医者になる」と周辺の人間に豪語してい

た。しかし、私自身はハイブリッド自動車を開発できるわけでもなければ、ごみのリサイクル推進の活動家でもない。私自身が地球環境の改善というミッションにどの部分で関わりあうかを悩んでいた。

そんなさ中、3回生の時に、4回生の最終的なゼミ配属を見据え、生徒が少人数制のゼミに割り振られた(FW3)。その時に、ゼミの中で担当の奥野教授(現：滋賀県立大学名誉教授)から与えられた課題が、「日本の中から農業が無くなっても良いか否か」というものであった。それに関して深く考えていくうちに、「農業の多面性」という点から、農業が食料を生産するという側面だけではなく、地球環境の維持、食糧問題・雇用の面などから重要な役割を果たしていることが見えてきた。

その後も継続的に、フィールドワークの授業の中で、「愛東マーガレットステーション(当時全国でも有数の直売所)」調査や農業法人の調査等を進めるうちに、農業の分野への関心が増大し、「農業に関わること」⇔「環境に関わること」という図式が見えてきた。私は何も技術等は持たなかったが、この分野であれば自分自身が活躍できるフィールドがあると確信できた。その調査内容を踏まえ、「直売所の運営」による学生起業を計画したが、当時は実

力不足から断念した。しかし、このフィールドワークで培った、「現場から情報を集めてくる」という体験は大変貴重なものとなり、今でもそれは活かされている。



その後、一般企業へ就職したが、5年後、やはり思いが忘れられず起業を果たすこととなった。会社名は、「ドクター・オブ・ジ・アース株式会社」(<http://dr-earth.co.jp/>)。もちろん、この会社名は、中学時代に志した、「地球の医者」になりたいという思いからきている。会社の目的は、「農業を通じて地球環境を守る」こと。生産者から市場を介することなく、「産地直送」で直接仕入れた青果物の小売・卸売を行っている。いいものを作っている生産者がたくさんいるのに価値が見出されていない現状を危惧し、そうした生産者が日の目を見られるきっかけ作りを行っている。店名は「野菜ソムリエの店のら」といい、ネット販売(<http://nora-web.ocnk.net/>)等も行っている。平成21年度は、新規事業部を立ち上げ、こだわりのレストラン向け

の卸売り事業をスタートさせた。この事業は「平成21年度豊能地域 おおさか地域創造ファンド採択事業者」としての認定もいただいている。「農林水産省の「FOOD ACTION NIPPON」推進サポーター(<http://syokuryo.jp/index.html>)としての参加や、経済産業省 平成21年度につぼんe物産市プロジェクト(http://www.ebussan.com/blog_detail/id=363)にも参加している。その他、ZAQが企画運営する「ここ惚れZAQ社長ブログ」(<http://kokohore.zaq.ne.jp/dr-earth/>)などにも参加。近年は講演依頼なども多くなってきている。

最後に、「環境」という言葉は、便利な言葉ではあるが、多面性を持つ大きな言葉であるともいえる。環境計画・政策学科では、そうした様々な「環境」に関して、幅広く学習できるというメリットがある。自分自身がどのような形で「環境」というものに携わっていくか、大学4年間で見極めることが可能であるからだ。一方では、その意思決定がなされなければ、どっちつかずの立場にさらされることとなることも合わせて記述しておかなければならない。環境政策・計画学科には幅広い分野の専門家の先生方がいらっしゃる為、自由裁量で学生生活の集大成と言える「卒業論文」へチャレンジできる点は魅力的である。

私は滋賀県立大学に所属した学生の中で、滋賀県立大学生活が、人生に大きな影響を受けたうちの一人であることは間違いない。現在の自分は、この大学に所属しなければ無いものと思っている。

企業の環境経営の現場から見る 環境政策・計画学科

環境政策・計画学科 第9期卒業生
谷口 浩

1. はじめに

私は現在機械メーカーの品質・環境マネジメントの部門で、国内外の環境関連の法規制対応や品質・環境監査、環境活動の企画などに携わっています。

企業の環境活動に携わる立場から環境社会計画専攻(当時)を振り返り、当専攻の有用性と今後の課題について述べたいと思います。

2. 当専攻の有用性

2-1. 専門知識

まず当専攻の有用性として環境関連の各分野の第一人者である教員から早い段階で幅広く専門知識を学べる点があげられます。

会社では環境汚染対策だけでなく、製品の環境対応や環境教育、CSR(企業の社会的責任)といった幅広い分野を扱いますので、専門知識は入社後からすぐに役に立ちました(特に廃棄物・化学物質管理など)。

また知識だけでなく、社内で環境対策を展開する際にはその内容を調べ、対応を自分で組み立て、関係者に発表していくプロセス面でも役に立っています。

2-2. 現場主義

次にフィールドワークを主体とした現場主義の徹底です。

どんな現場があるかを知るだけにとどまらず、問題解決とその面白さを体感出来るのは当専攻の強みです。

また現場で事を進める際には、合意形成技法などの問題解決のプロセスが役に立ちました。会社組織でも何かを始める時には無理という言葉が聞かれることがあります。そうした場面で「本当に前に進めないのか？」をじっくり検証ながら少しずつ実現に近づける。こうしたプロセスの考え方がいまでも教訓になっています。「仕組みで自動化」などというと格好が良いのですがあまり上手くいかず、泥臭く現場に通って初めてさまざまな情報や交流を通じてようやく形になる。そんな場面ばかりです。

「キャンパスは琵琶湖」という大学の理念の通り、地域の現場でやってきたことが力になっています。

2-3. ビジョンと多様性

あとひとつ強調したいのがビジョンと多様性を大事にしたカリキュラムです。当専攻の環境というテーマは他学部以上に、世の中がどうあるべきかを考える必要があります。

企業の環境活動でも内容や進め方、組織の各階層の思いは多様で、何を指すのか、またその意義を明確に示すことは最も重要になっています。

「なぜそうするのか？」という問いに答えるビジョンがなければ人も組織も動きません。またその過程には多様性を受け入れる幅広い視野・考え方が求められます。

答えのない政策の講義や演習、卒業論文を考えるときに、どうあるべきかという視座を養う機会がありましたし、他学部を含む多様性のあるカリキュラムが視野を広げてくれました。

当専攻が表立ってPRする内容そのものになったかもしれませんが、裏を返せば意図することが社会の現場でも通用することの証だと思っています。

3. 当専攻に期待すること

次に当専攻の課題と期待について述べたいと思います。

3-1. 卒業論文までのステップの再編

つらかった卒業論文と言えば、卒業生の大半は共感されると思いますが、3回の前半まではとは打って変わっていきなり卒業論文で高いレベルを要求さ

れるため、助走環境に対してハードルがやや高いように感じています。

そうした意味で3回生時に担当教官の専門・現場の範囲で論文を作成し進め方を体験するなど、要求するレベルを前もって体感するステップが必要だと感じます。論文作成のルールを一度走ることで、本番の卒論にスムーズに取りかけられるものと思われ

3-2. 科学技術的なアプローチの強化

もう一点は科学技術的なアプローチの強化です。文理総合という形を取られていますが、学年が上がるにつれ、文系的な要素が強くなり、技術者の輩出が割合少ないのではないかと感じています。開学10年を境に技術系の教員の退官などが相次ぎま

した。これは非常に残念なことで、環境ビジネスの展開にしても社内の環境経営の推進にしても、技術的な知識・技能なしには前に進みづらい状況になっています。

そこで同学の工学部や地域の関連団体との連携充実といった方向も含めて、政策実現のツールとしての科学技術的なアプローチの充実を期待します。

3-3. 活躍のフィールドの発見・支援

最後に学生が早くから自分の現場を見つけられるような施策を期待します。現場を回ったり、各分野の第一人者の体験を聞く政策形成・施設演習がありますが、その一端を感じるレベルにとどまっていると感じます。

そこで学生が一定期間現場の問題解決を進めるような活動の場を提供し、学生が当事者・主役になり、知識・経験・意欲を活かすことが出来れば、能力開発だけでなく進路選択に寄与するものと思われ

4. おわりに

「ここで変わらないやつは、いつまでも変わらない」、「学ぶことは変わる事」最も印象に残っている先生の言葉です。当専攻では変わる仲間も、変わる自分も楽しめる場所ですし、環境への奔流が強くなればなるほど、当専攻の意義は今後より一層広がると思われます。

ふりかえって気づく “環境社会計画の魅力”

環境政策・計画学科 第9期卒業生
新玉 拓也

滋賀県立大学（以下、県立大）を卒業して早いもので3年が過ぎようとしています。県立大と私との出会いは、“環境社会計画”という聞きなれない名前に惹かれ、オープンキャンパスに行ったのが始まりです。もともと自然や環境に興味があったので、半分自然公園や農場といったようなキャンパスは大変魅力的でした。そして、環境社会計画専攻（当時、以下、社会計画）のコーナーでは、フィールドでの活動写真や地域のシステム図など、興味深いものがたくさん並んでいました。高校3年生の当時、ほとんど受験のための勉強しかしていなかったので、大学ではこんなおもしろいことを勉強するんだと思ったのをよく覚えています。社会計画では、環境に関する充実したカリキュラムが組まれていましたが、そのつながりや重要性に気づくのは、卒業研究が終盤にさしかかるところ、あるいは卒業して社会に出てからかもしれません。今ふりかえって思う社会計画の魅力について、私の体験をもとにお伝えしたいと思います。

環境科学部の講義の特徴的なものとして「環境フィールドワーク」があります。発電所や博物館、伝統的な水利用が残っている地域など、実際のフィールドに出てディスカッションなどを行います。現場を自分の目で見て、体験するというのは、問題解決において欠かせないことです。はじめは遠足のような気分で受講していましたが、レポートや発表を繰り返すうちに、自ずと考える力が養われていったように思います。そして、このような作業をひとりで行わなければならないのが卒業研究です。

私の場合、テーマとして琵琶湖の環境保全に関わる行政や市民の連携を取り上げました。毎週のように現場に通い、次第に自分もスタッフのひとりとして関わるようになりました。そうすることにより、現場の課題もわかり研究の方向性も定まってきました。そこでは、河川行政から農業、まちづくりや魚類の生態学的な研究など多くの分野が入り混じっていました。そこではじめて、社会計画のカリキュラムの意味に気づきました。法律（環境法）、統計（応用統計学）、生物学など非常に幅広い分野の講義があったのも、問題解決のために物事を多角的な視点で見る訓練、あるいは何かの分野に本格的に取り

組む際の基礎知識だったのだと思います。社会計画の先生方の熱心な指導により、“現場で自ら行動し考える”という意識をしっかりと持つようになりました。

卒業研究や市民活動など社会に出るようになると、いたる所で先輩方の活躍を耳にします。私も琵琶湖博物館うおの会という琵琶湖の魚類の調査・保全を行う団体に入っていましたが、多くの先輩方が中心メンバーとして活躍していました。卒業研究でいろいろな団体や機関にヒアリング調査に行った際も、県立大というだけで快く受け入れてもらえました。いずれも、以前に調査や研究で県立大生と関わったことがある、卒業生が働いているなど、多くの先輩方のご活躍の積み重ねがあつてのことだと思います。



田んぼ水辺研究会
高島市マキノ町

上の写真は県立大環境科学研究科の院生であり、多賀町立博物館学芸員である金尾さんに誘っていただいた研究会的一幕です。「卒論に関わるやろうし、おもしろいからおいで」と誘っていただき、わけも分からず参加したのですが、当時京都精華大学教授の嘉田さん（現、滋賀県知事）や琵琶湖博物館上席総括学芸員の前畑さんなど、琵琶湖の保全を担っている錚々たるメンバーでした。

最近では、地域再生やまちづくり、生態系の保全など、県立大の取り組みが新聞やテレビなどで取り上げられることも多くなっていると思います。仕事の合間に日経新聞を読んでいると、「近畿の主要大学を対象にした『大学ブランド偏差値ランキング』において、『地域産業に貢献』という項目で滋賀県立大学が1位」という記事がありました（平成21年12月10日付日経新聞）。県立大が力を入れて取り組んでいることが社会でも評価されており、とてもうれしい気持ちになりました。私も県立大の卒業生として恥ずかしくないよう、地域に貢献できるよ

うなことをしていけないといけななと思いました。

卒業後も社会計画で学んだことを意識し続けることで、自身の活動の幅も広がりました。大学院に在学していた2008年には「第三期琵琶湖河川レンジャー（国土交通省琵琶湖河川事務所の委嘱）」に任命され、河川行政と住民をつなぐコーディネーターとして活動を行いました。また、このように大学で身につけたことを自分が生まれた町にも還元したいと思い、地元でも魚の保全や環境教育に関連した活動を行うようになりました。その結果、三重県亀山市でも、環境関連の委員や地球温暖化防止計画の策定に関わることになりました。その時期に設立した市民団体「魚と子どものネットワーク」は就職してから活動も続け、ライフワークとなっています。

ふりかえってみれば、臆けながらもいろんなことを学んだ講義、叱られながらも必死に取り組んだ卒業研究が今の自分の基礎になっているなと思います。現在は一般企業に入社したばかりで、仕事については何も言えませんが、目的を達成するために仮



お魚ふやし隊自然観察会
高島市新旭町

説を設定して取り組むということは、研究でも仕事でも共通のことだと思います。仕事で嫌なことがあったときは、川と魚でつながった琵琶湖の仲間がいるということを支えに乗り越えていきたいと思っています。

9年間を振り返って

環境建築デザイン学科 第1期卒業生

西川 聡

(アーキテクトシップ・シニアアソシエイト)

滋賀県立大学大学院を1期生として修了してからあつという間に9年の月日が経とうとしています。入学した頃には校舎も半分だけが完成した状態で、今思えば、先生方も学生たちも共に手探り状態で講義や演習、フィールドワークといったものに取り組みながら、おぼろげながらも徐々に大学のかたちが形成されていったそのただ中に居たのだと感じます。

2001年のちょうど今頃、私は東京・渋谷にスタジオを構える設計事務所「アーキテクトファイブ」のアソシエイトとして設計活動をはじめることとなりました。アーキテクトファイブでは幸運にも小さな住宅から大学の駅前キャンパスに至るまで、大小さまざまなプロジェクトを経験させて頂き、建築設計というものを多様な側面から俯瞰することが出来ました。

入所後すぐに担当したプロジェクトは東京都町田市にメインキャンパスを構える私立大学の駅前キャンパス「桜美林大学PFC」の指名コンペでした。当

時、組織設計事務所など4社の設計者が指名されプレゼンテーションを行いました。最終的には我々の提案が評価され実施案として選定されました。代表や先輩スタッフの指導や助けを得ながら、同期のスタッフと二人でまとめあげた仕事でしたので、選定されたときの喜びもひとしおでした。

このプロジェクトにおいて重視したことのひとつに、隣接する鉄道の線路や駅舎といかに良好な関係を生み出すかということがあります。そのことに対する答えとして、大階段とガラススクリーンという仕掛けによって、鉄道を利用する人々へ大学の活気を伝える一方で、鉄道騒音や日射を和らげるバッファーとして機能させることを考え、一定の成果を得ることが出来ています。

しかし一方で、心残りの点もあります。この建築には2層吹抜けのエントランスホールがありますが、その部分の空調を天井に設置した空調機で行う計画としました。コストや納まりの面から仕方の無かった部分もありますが、必ずしも効果的な空調とは言えず、建築の熱環境に対してもっと熟慮し、いろいろな可能性にチャレンジすべきであったと、自らの力の至らなさを大いに反省しました。しかし、この反省が原動力となり、その後の建築設計において熱環境をはじめ、素材や技術的なことに対する試みについて、より積極的に取り組みチャレンジする

姿勢の礎となっています。

その後、いくつかの設計コンペや幼稚園・保育所一体化施設、住宅などの仕事を経た後、鹿児島県霧島市にある黒酢の老舗「坂元醸造」の展示・販売機能を有する施設「くろず情報館」を担当することとなります。ここでは、建築主の意向もあり、自然の力を用いて生み出される黒酢を象徴するファクターとして、自然エネルギーの活用が求められました。また、それと同時に不定期に降り積もる桜島の火山灰への対処という課題も投げかけられていました。

このふたつのテーマを手がかりとして、我々は高低差のある敷地形状を活かし、大地と一体化した半地中建築を提案しました。地表レベルと建築の屋上レベルとを一体とすることで、火山灰などに対するメンテナンス性を高めると同時に、屋上緑化によって建築の断熱性も高めるといった、複合的な効果をシンプルな形態と構成の中に包括・実現した建築です。

その他にも太陽光発電パネルや火山灰を原料とした左官素材の活用、床下ピットを利用した居住域冷暖房の展開なども盛り込んでおり、卒業後の5年間の取り組みの集大成とも言える意欲的なプロジェクトとなりました。

そして現在は、松岡拓公雄教授が主宰する設計事務所である「アーキテクトシップ」に所属しており、これまでの経験をもとに、地中熱利用冷暖房などの先進的な環境技術と庇や高窓といった古来からの知恵や工夫とを織り交ぜた「エコプレミアムセンター」の設計を手がけるなど、さらなる環境建築探求の道程を歩み続けています。

建築は様々な産業や文化、風土や技術などといった多岐にわたる事象を反映させる鏡のような存在です。このことは裏を返せば、建築の「完成度」や「質」をより高めていくには、あらゆる分野を横断的に考えることができる幅広い視野と見識とが求められるということです。そして、そのような素養があればこそ、新たなことへのチャレンジが可能となります。今にして思えば、その視野と見識のベースを醸成させることができるまたとない好機が大学で学ぶ数年間であろうと思います。

私の場合、特にフィールドワークにおいて他学科の学生とともに様々な視点を持ち寄り、意見を交えながら一つの結論を導き出すという他大学ではなかなか得られない機会を得ることが出来たことが、今日の設計活動を支える貴重な経験となっています。建築の枠に閉じこもったままでいくら建築を突き詰めても、得られるものはたかが知れています。特に、これからの時代に求められる建築像は、様々な課題を調停することでより一層その存在価値を増していくような建築なのではないかと考えています。そういった意味でも他分野からの視点で明日の建築を見つめる眼差しが重要であり、また、必要とされているのではないかと思います。

環境科学という総合学を修める学部に属する全国的にも希有な存在である母校の建築学科にはぜひとも、一見無関係にも思える分野にも旺盛な好奇心を持って取り組み、吸収・昇華できる人材を育てていくような「横断的教育」を今後も試行錯誤し、実践されていくことを、大いに期待したいと思います。



(写真：上から順に「桜美林大学 PFC」「くろず情報館」「エコプレミアムセンター」)

そこにしかない価値を求めて 都市部から脚を運んでくれる — そういう存在へ

環境建築デザイン学科 第3期卒業生
南 政宏

私は環境科学部環境・建築デザイン専攻(現学科)の卒業生3期生であります。私は環境科学研究科大学院卒業後、プロダクトデザインに興味をもちまして、そちらの道へ進む事になりました。

現在は滋賀県立大学の人間文化学部生活デザイン学科で助手をしています。ここに来てから4年が経過しますが、自分がこういった教職につくとは思っていませんでした。とにかくわけもわからず教員になったというところがあり、未だに試行錯誤の日々であります。幸いだと思えますのは、教員数が少ないことも一因ですが、ゼミも持たせてもらい、責任ある仕事を任せて頂いているということでしょうか。若い先生が多い人間文化学部ですが、学生との距離が近いこともあり、良いスタンスで学生と接することができているとも言えるかもしれません。よく、他大学の学生には「こんな先生がいたらなあ」と羨ましがられます。現在の教育の現場では稀なポジションであるのかもしれません。

私はプロダクトデザイン分野で雇われていますが、私自身はあまり分野にとらわれず、周りの環境を見て自分のすべき事を考えているつもりです。どのような状況にあっても条件を整理することが何よりも重要だと思うようになりました。私の属する生活デザイン学科は大きく三つの分野を有し、その事は教育の専門化、高度化には不利であると言わざるを得ませんが、ここだからこそできることを考えればいいと考えての指導を心がけています。それは、世間一般が今現在志向している方向とはおそらく異なります。資格を取ろうとすれば、自ずと専門分野に集中することが必須となります。専門分化しないことは研究者の生きる道とは正反対のものであります。しかし、デザイナーというのは包括家であり、専門家ではないので、そういった環境にいるから出来ることを模索しています。大学の中で学べることもあります。大学に属しながらいかに外に目を向けるかが学生時代には重要なことだと思います。研究室に閉じこもらず、できるだけ大学外で活動しその背中を学生に見せることが出来るように心がけて教育活動を行っています。

最近の活動としては、様々な企業と製品開発を進めることが多くなってきました。東京での展示会に

作品を出品することも多いです。デザインという業界においては、東京への一極集中化は加速するばかりですが、東京と地方の二つのフィールドを使う事も今後のデザイナーのあり方ではないかと考えています。東京に行ってわかる滋賀ですべき事もあります。滋賀にいるから東京でも知られるということもあります。

滋賀県立大学を10年以上見てきました。大学も全入時代に突入し、国公立というだけでは学生が集められない時代となってきました。子供の数が最も多かった私の年代の頃とは受験の様子も様変わりしています。各専攻の学科化などに伴い、教育内容は専門化高度化したかのように見受けられますが、そうではない所に、当校の良さがあったように思います。部門の縦割りが進み、学科間での弾力的な連携が取りにくくなったのは残念な点だと思います。その一方で、近年、地域に根ざした大学という方向性を明確にし、様々な地域連携プロジェクトが動いているのは地方大学の目指すべき一つの方向性としては可能性のあるところだと思います。と、同時に、それらを県内だけで終わらせるのではなく、全国レベルで広報していくこと、それが継続的に注目されるような内容、成果にすべきであると思います。この辺りのファクターは情報メディアが分散していた10年前と比べると最も大きな違いであろうと思います。滋賀県立大学は、首都圏の大学等と比べると、やはりその情報量や、学生間での横のつながりという点においてはどうしても劣ってしまうと思います。そこにしかない価値を目指し、わざわざ都市部から脚を運んでくれる。そういう存在にしていかなければならないかと思っています。

今もデザイン分野の領域はどんどん拡大を続けており、スタイリングやデコレーションがデザインではなく、企業や社会の持っている本質的価値を見だし、どのようなものを創るのか、そしてそれをどういった形で社会に提案していくか。企画から販路開拓までデザイナーがこなすという時代になっています。資本主義経済もここに来て息詰り、社会構造が抜本的な変革を迫られていると思います。私たちの多くの同世代は会社に勤めながらも危機感を持ち、独立心を持っているように思います。世界が大きく変わろうとしているのを肌で感じます。大学での教育においても、10年前と比較すれば、かなり変わったと思いますし、変わらなければいけない部分も多くあると思います。そんな世界の変換期を今迎えていると思います。変化する世界を見る幅広い視野と新しい考え方が求められていると感じている現在です。

滋賀県立大学で学んだもの

環境建築デザイン学科 第4期卒業生
築瀬 優子

私は(財)滋賀県建築住宅センターで建築基準法に基づく確認検査の仕事をおこなって7年半になります。職場には高校や専門学校、大学(滋賀県立大学もしくは前身の県立短期大学卒業の人が一番多いです。)などさまざまな最終学歴の人が多数います。はっきり言ってひと一人が一日に行う作業量にたいした違いはないと思います。建築基準法だけに限って言えば、専門学校生の方が大学生より知識は多いとさえ思います。しかしながら、私はやはり大学で学ぶことの必要性を感じるのです。

私達は建築基準法に基づいて図面の審査、現場の検査を行い適合しているかどうかチェックしています。それを、ただ事務作業の一部として行うことは容易なことです。新しい方法やよくわからない申請があれば、安全策をとって駄目だと言ってしまえばよいのですから。しかしながら私はそれを良しとはしていません。建築技術は日進月歩の世界です。できるだけ先駆者達の努力に報おうとおもいます。法律の意図することを法文から解釈し、可能な限り設計者や建築主の要望に応えられるよう努力し、希望どおりにならなくても、なるべく近い形にすることができする方法を提案できるよう心がけているつもりです。しかしながら残念ながらこのように考える人間は一握りで、窓口に来られた設計者の方の案はある意味真面目といえる役人気質な人達に握り潰されてしまうことの方が多いのです。

滋賀県立大学で学んだことは、自分の力で調べることです。職人さんなのなかには耳学問ですませようとする人達があります。その人達に「法律の〇条に書いてあります。」といっても調べようとはしないのです。そしてそういった人ほど「前はこれで通った。」とか、「〇〇ではこれで通った。」などというのです。耳学問で得た知識は、人に左右されてしまいます。もちろん人から得る情報も重要ですし、てっとり早いものですが、建築基準法という法律にのっとっておこなうのであればやはり小難しいものであっても法律を読む必要がありますし、それでもわからないことがあれば書籍を調べたり問い合わせをしたりして自分の力で理解しなければならぬと思います。おどろくべきことに自分の力で調べようとしないうのは職人さんだけではなく、確認をおろす側にも多数いるのです。他人から教わるだけではなく、自

分の力で調べることができるようになったことは人生に大きなプラスになったとおもっています。

私が滋賀県立大学で学んだときは開学後間もない頃で、未熟な学校でした。オーケストラ部に所属していましたが、楽譜や楽器がなく教官から借金をして備品を購入しました。また、私の建築のクラスには耳の聞こえない友達がいいて、その友達は普段は私や他の友人がメモしているノートを見て授業を理解していました。3回生になったときに、その耳の聞こえない友達が私のとっていない講義をとることにしました。私と耳の聞こえない友達はボランティアでノートをとってくれる人を頼めるシステムを作ろうとおもいました。ボランティアといってもきちんと先生おっしゃっていることを速記しようとするとうと臆病になるのではないかとおもうほど大変なことです。少額でもお礼ができるようにしなければいけません。本当の無料のボランティアですと居眠りをしたり、要約しすぎて簡単なものになってしまうから、私の友達が文句をいえなくなってしまうからです。当時龍谷大学などにはノートテイクと呼ばれるシステムがあったのですが、滋賀県立大学にはなかったのです。日高学長にノートテイクのシステムをつくることで面会のアポイントをとりました。学長は忙しくて3カ月先までスケジュールが埋まっていますと、秘書の方に言われたのですが、翌日には電話がかかってきて、すぐにお会いすることができました。恐縮する私たちを前に、日高学長はむしろ大学として教育の機会を奪っていたし、それに気付かなかったことを詫言いていらしたのです。そしてその次の学期からノートテイクをしてもらった人に小額ながら謝礼がでるようになりましたし、翌年からは謝礼も増やせることができるようになりました。このように未熟な学校だからだったからこそ、教官や先輩もとても意欲的で活発な雰囲気があったとおもいます。

社会人になって後悔したことは、学生時代にもっと勉強しておけばよかったということです。当時はまさか法規を仕事にするとはおもってもおらず、デザインを仕事とするつもりでいましたので、構造や建築法規の授業を軽んじていました。本当のことをいうと、デザインも構造や法規を無視することはできないのですが、当時はそんなことは他の誰かがチェックしてくれるとおもっていたのです。けれども、構造や法規の専門の人がいるところは大手ゼネコンのほんの一部ですし、個人事務所であれば、構造計算を外注することはあっても、基本的に自分で行わなければいけないのです。当時の私に戻ることができたのなら、もっとまじめに授業を受けたいと

もいます。

在学中の皆様は、このように後悔することのないよう、勉学に励み、充実した学生生活をおくっていただけますことを願います。

社会に出てから実感する 「滋賀県立大学あってこそ、今」

環境建築デザイン学科 第5期卒業生

河原 司

(有限会社アーキテクトタイタン取締役 共同主宰)

■ 学生から社会人へ

私が修士課程を修了したのはつい最近の2009年。19歳より10年間も在籍いたしました。一般的に言えば社会人1年生ですが、自分としては少し認識が違います。1996年17歳からウェブ制作を始め、在学中にはアパレル企業のウェブ業務委託スタッフとして内勤も経験しました。建築では松岡拓公雄教授の指導のもと実際に建築された個人住宅の基本設計や、京町家再生設計から現場調整などを複数軒に携わり、実践的な建築設計教育を受けさせていただきました。そして大学院在学中の2005年に建築・ウェブ・印刷物の企画・デザイン会社「(有)アーキテクトタイタン」を設立しました。建築設計の力を社会で生かすための下地を大学が充分に育んで下さったことと、インターネットの民間移管初期から個人的に続けてきたウェブ制作の仕事、この両面を生かしたいという思いからでした。ここから（自称）社会人だと感じており、今年で6年目になります。

■ パートナースhipでの経営と環境科学部

アーキテクトタイタンは、松岡研究室に所属していた、河原司、中川晴夫、中嶋達郎、渡利真悟



写真1： 松岡研究室にて基本設計に関わった住宅

(50音順)の4名で起業しました。組織形態は代表権を持つ4名の社長による対等なパートナーシップ。これは松岡教授が大学就任以前に経営されていた(株)アーキテクトファイブを参考にしています。ファイブでの事例を「パートナーが対等に様々な意見をぶつけあうことで案件を磨き上げる。この手法が建築という仕事においてふさわしいこと」と私は理解しており、複数の人間のフィルターで多面的に評価をした上で建築を作ることが重要だと考えています。私の中に根付く「建築物を建てる際には慎重に」という考え方は、まさに環境科学部での教育の結果だと感じています。またこれを実践する手段として「パートナーシップによる経営」をも学び、その道を歩んでいます。また、故 内井昭蔵教授の「環境学は関係学」ということばは、自分が環境を捉え仕事を進める上での基礎概念として心に残っています。

現在、中嶋と渡利が辞任し、私と中川は対等パートナーシップにて経営を続け、従業員の意見も柔軟に取り入れ、現在は10名を超える組織になりました。



写真2：
アーキテクトタイタン事務所外観(1931年・昭和6年築・2006年再生設計)



写真3：
アーキテクトタイタン事務所(玄関・通り庭)

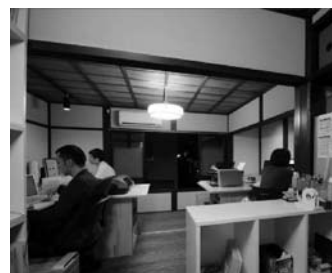


写真4：
アーキテクトタイタン事務所(2F執務室 左手前が筆者)

■ 在学時から続く活動

2001年から現在まで10年近く関わり続けている景観修復活動及び実証学的研究を一冊の本にまとめ2009年末に出版されました。「大覚寺大沢池景観修復プロジェクト 古代と現代を結ぶ文化遺産」(真板昭夫・河原司編 共著 世界思想社刊)です。延べ1500人の力が結集したプロセスと成果が本となり、また编者として名を入れて頂くという、思ってもみないことも起こりました。本を通じて多くの人々に活動を伝えることができることが嬉しくてたまりません。卒業設計や修士論文でも大沢池を題材にしました。人生に大きく影響するプロジェクトに出会ったのも環境科学部に在籍した縁に他なりません。

その他にも彦根の集落調査で歩き回ったことは、住まいを考える上で、また湖東地域への愛着の礎となっていますし、京町家再生の研究は、現在の弊社事務所は町家であり、生活の一部となりました。大学時代の活動が、確実に今に結びついています。



写真5： 大沢池景観修復プロジェクト
ヒシ・ハス維持管理作業時の写真

■ 現在の業務

建築分野では、住宅・オフィスの改修設計などを行い、現在、会社設立後初となる新築個人住宅が近江八幡にて進行中です。また三重県島ヶ原にて閉鎖された製材所の活用や林業問題等を総合的に取り組む社会的活動「ホヅプロ」に設計者として参加しています。

また平行してウェブデザイン、運用、コンサルティング業務、また印刷物デザインやスタジオ撮影、映像の制作を行っています。よく「ウェブと建築で共通性はあるのですか？」と質問を受けます。私はあるとあって「利用者」がどう感じるか使いやすいかということが重要であることや、与条件



写真6：住宅設計のイメージ
パース(近江八幡)

に対しての最適解を見つけるということ。建築が各空間の質とそれぞれの繋がりを重視するのと同じように、ウェブでは1ページの役割・デザインと、情報の関係性をリンクで繋げていくところです。デザインをしていくプロセスが似ていて、建築設計で学んだ手法が他分野にも生きています。



写真7： ホヅプロ参加者のための「ねどこ」



写真8： 同内観 薄板ラーメン構造にて
短辺方向を全面開口

■ 滋賀県立大学と30歳の自分

故 日高敏隆 元学長の動物行動学の授業で「利己的な遺伝子」という概念を学びました。「生命は遺伝子の意志を次代に運ぶ器に過ぎない」と。この言葉は今も私の心を動かし続けています。「では何のために生きるのだろうか」と。30歳という節目を迎えた今、私は悩み考え一つの答えを出しました。それは「世界を変える仕事をしよう」ということ。大それたことでなくとも、ほんの一部でもいい。こうなったら良いのに・楽しいのに、と思う方向へ世界を変える。その実感を持って仕事に取り組んで行くことと決心しました。

自分の人生に大きな影響と実践力を与えてもらった滋賀県立大学での教育。これからも社会で使うことで磨きをかけ、世界を変えていく力の源としていきたいと思っています。

今感じることができる 自分の感性を信じて…

環境建築デザイン学科 第6期卒業生
中島 麻希

10年前、当時高校3年生の私は受験まっただ中にいる中、自分の進みたい道について毎日思い悩んでいました。

地元で都市開発事業をやっている父の影響もあり、街づくりやそこにある公園や建築に興味はあったものの、そこに携わる為に何がしたいのか。自分の進む道が見えないまま受験の為に勉強する日々の中、将来に対する不安を積み重ねていました。

そんな時に出会ったのが、滋賀県立大学でした。

滋賀県立大学 環境計画学部 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻(当時)

建築だけを学ぶのではなく、環境という大きな枠組みから地域を考え、建築のあり方を含めて構造やデザインを学ぶ。

他の大学にはないカリキュラムの組み方やフィールドワーク等に力を入れた授業内容に惹かれ、すぐに決めました。

大学で得たものは、授業でならう知識だけでなく、先生方、友人、また周辺の環境だったり地域の人だったり、他の大学でももちろん得ることができるのだとは思いますが、滋賀県立大学の環境だったからこそ、のびのびと楽しみながら学べたのではないかと思います。

卒業してから5年、現在私は照明器具専門メーカーでライティングデザイナーという肩書きをいただいています。

仕事内容は主に、設計事務所やデザイン事務所に対して照明手法の提案することです。

業態は飲食・物販・理美容・住宅・施設・アミューズメント等多岐にわたり、様々な専門分野の方とお仕事をするができることは、とても勉強になり、刺激をいただくことができます。

物にあたって初めて認識することができる光を扱うことは、想像以上に難しく、その本質はつかんだように思っても全くつかめません。

人が心地よいと感じる光や、活発な気分になる光、安らぐ光に楽しい気分になる光、不安になる光やしめやかな気持ちになる光。

個性のある光を限りある光源で表現しながら平面図に落としこみ、出来上がる空間をイメージするこ

とは、どれだけ考えても終わりが無いと感じることも多々あります。

また、それを感じる人の感覚は味覚にも似ていて、同じものを他人が同じ様に感じてくれるとは限りません。

老若男女全ての人にとってやさしい空間とは何か、日々悩まされます。

近年は、メディアでも温暖化の問題がよくとりあげられ、環境に対する配慮への関心が高まってきました。

また省エネ法改正等の影響もあり、施主からの省エネのプレゼンテーション依頼も増えました。

照明事業のみにとどまりませんが、LEDの進化も目覚しく、3年前までは通常使う光源としてはほとんど利用できなかったものが、ハイパワーなものになり、日常の中でもLEDが使われた器具が目につくようになってきています。

今後の照明事業を支える柱に間違いなくなってくると思われます。

そんな、進化のまっただなかの今だからこそ、技術に劣らないソフト面の充実が必要となってきています。

環境が変わり、技術が進歩し、人々の求めるものが時代と共に変わっていく中で、環境のため、地域のため、人のためにできることは何か。

私が携わっている光は、環境作りという枠組みから見ればごく一部かもしれませんが、そこから発信していけることを精一杯やっていきたいと思っています。

私は在学中、決して勤勉な学生ではありませんでしたが、それでも在学中で培ったものはたくさんあったのだと卒業した後、働く中で感じることができました。

もしも在学中の自分にアドバイスできるとすれば、間違いなく『もっと勉強しておきなさい!』と、言いますが…

この大学を卒業したからこそ今感じることができる自分の感性を信じて、そしてそこでできたつながりを大切にしながら、今後もよりよい空間造りをしていけるよう日々勉強し、奮闘する毎日を楽しんでいければいいなと思っています。

県大時代をとおり過ぎて 今思うこと

生物資源管理学科 第1期卒業生
藤原 真吾

初めは生物の研究者になりたかった。5才の頃祖父母と同居していた私は、横浜の郊外にある公団の団地に引っ越してきた。その団地は開発し始めたばかりの1年目のところであり、周囲は森や沼ばかりで、所々に畑や田んぼがあるという、犬上川の上流で見られるような風景が残っていて、今の横浜からは考えられないような環境であった。小学生の低学年の頃は、森や沼に入って陸生や水生昆虫やその他の生き物とふれあう機会も多く、生物の道に進みたいと思った素地はここで養われたものだと思う。加えて、その時代は、公害問題を克服してきた時期でもあり、社会の関心もそこに向けられていて、人間を含む生物と工業化の営みにどうバランスをつけるのかということが問題にされていた時代で、こうした社会の流れにも子供ながらに敏感に感じていたのか、小学校高学年になるとすでに社会と生物を核とした仕事を夢見る少年になっていた。

時代はそれから10年ほど経ち、県立大学に入学する。当時、受験に失敗し悩んでいたところに、その年初めて生徒を募集した県立大学がセンター試験を使わない入試を行うようだ、設立理念もおもしろいし何より教授陣も頼もしいと噂を耳にした。ここで渡りに船とばかりに受験したところ、結構な倍率があったらしいが運良く滑り込む。実はこの時、東京でもいくつかの大学にも合格していた。偏差値という指標でみてみれば、一応トップレベルといえるかもしれない。しかしそのような中、関西というところにある新しい公立大学という新しい選択肢ができたのである。何もかもが新しいためきっと普通でない変わったことができるのではないかという期待と、東京とは違う文化の中で勉強するのもおもしろそうだし、親元を離れた一人暮らしも大事だと考えて、滋賀行きを一大決心する。

県大入学

案の定というべきか、想定通りと言うべきか、県立大学の当時の印象は、何もない田舎の大学。入試の時にはまだ工事中で学校に入ることすらできず、大学が始まっても当初二年くらいは同時並行的に研究棟が建設中といった具合。また、クラブも研究室もなく、先輩もいない大学であるので、生徒は課外活動をしたければ自分で動かなければならず、すべ

てが試行錯誤の連続。しかし、それこそが大学のブランドよりも県大を選んだ理由だったのだ。そんなところであったからこそ、クラブ活動の立ち上げにも参加できたし、生徒のいない教授などの部屋で毎日暇している先生方を独り占めにしているいろいろな話を聞きまわったり、院生がいないので手足となって様々な研究や調査を手伝ったりと、各研究室単位の大学教育の枠を超えて好き勝手やれる環境を作り出して参加することができた。自分がやりたい学びたいと思ったことを自分で体験できたのである。当時の最もよかったところは、そういった自由に何でもできるという雰囲気と何でもやってしまう生徒の行動力にあったように思っている。そういった経験を積みさせてもらうことができたのが、県大であり、今の僕の行動のベースになっていると思う。

私はこのような大学時代を通じて、自分の適性は研究よりもより現場での調整業務が向いているのでは無いかと思い始めていた。この時、大学に残ることではなく、就職する（研究職から離れる）という大選択をした。

就職活動

就職活動で会社を選んだ際も大学での経験というのが大きく影響していたと感じている。例えば、社会に出るとき運良く大きく3つの選択肢を手に入れることができた。地方の公務員になって地域・都市の農政に貢献するか、一般企業に入社して経済と一体となって環境問題の解決にあたっていくか、それとも海外というインパクトの大きい世界を相手に行動を起こしていくかという選択肢である。

当時の就職環境はほとんど今と同じであり就職氷河期まっただ中、そして浪人もして大学院に行った私は誰よりも年は上であった。加えて、私は一期生なので、当然先輩もおらず、就職を斡旋してくれるという意味以上に、社会にどんな職業があつてそこでどのようなことがなされているのかを伝えてくれる頼れる先輩方がいなかったことが大きなハンディであった。そんな悪条件の中で、なぜ内定をいただくことができたのか。これはやはり学生時代の経験があつてこそであつたと今でも強く感じている。このハンディを逆手にとって自分を売り込んだからだ。

「逆境に強くなる。」

これまで自分がたどってきた道は、決して楽な道ではなかった。しかし、すべて前向きな思想の中にあるよう努めていたし、また、その困難が伴う道は、あえて選んできた自らの道でもあった。当然すべてが順風満帆ということではもちろんないが、そういった道程にあつて良いことも悪いこともすべて

が自分の成長の肥やしになったのは確かである。このピンチの中にチャンスを見つけ、過去の経験が無駄にできなかったこと、そう言い聞かせてきたことが今の自分を作っていることは間違いない。そうしたことの結果として、最終的にJICA(国際協力機構：私が入った当時は国際協力事業団といった)への入団に結びつく。JICAを選んだのは、選択肢の中で最も困難で最もインパクトの大きい仕事ができると思ったからであった。

JICA、そして今

そして、現在、私はJICAの職員として、アフリカのマラウイという国に派遣され仕事をしている。ここでの仕事の主な内容は、マラウイという国が国を発展させるために必要な要素は何かを調べ、その要素を取り込んだ活動計画を策定し、日本からリソースを持ってきてマラウイという国の能力強化をはかっていくお手伝いをするのである。時には、当然専門的な知識も必要になるが、専門的知識は人の力を借りこともできる。よって、その場で専門的に解を導くよりも、今何が求められているのかを的確に

状況判断して、物事を調整して形にしていく能力が試されるのがここでの仕事である。途上国とはいえ、1つの国の将来の姿を左右することにもなる重要な仕事であり、責任もやりがいも大きい。

少年の頃から目指してきた大学での生態学の研究とはだいぶ世界が違ってしまっていたが、自分が動き回って調整しながら物事を上げていくということは、これまで自分が培ってきた生活スタイルそのものであり、大学時代の経験の集大成でもある。人生どこで見方が変わるかわからないが、身の回りのものすべてに可能性があることもまた確かであって、私にとっては学生時代に広く物事を見たり、自分を見つめ直したりする経験を積むことができたために、今このような職業についているのだと思っている。

藤原真吾：

1995年県立大学入学（一期生）

2001年国際協力事業団（現国際協力機構：JICA）入団、無償資金協力部、森林自然環境協力部、地球環境部を経て、2007年5月よりJICAマラウイ事務所勤務

卒業生として環境科学部に思うこと

生物資源管理学科 第1期卒業生

吉田 貴宏

私は卒業後、滋賀県の農業技術者となりました。現在は、農業者や地域の営農活動における課題の解決を支援する普及指導員という仕事をしています。滋賀県の農業技術者に県大出身者のなかで他に4人おり、それぞれ行政と試験研究の職場で頑張っています。



私が、その年初めて学生を受け入れる県大(生物資源管理学科)に入学しようと思ったのは、以前から関心のあった環境問題と農業の勉強を同時に出来そうだったからです。

入学後は、期待していたとおり、人間学や基礎科学の授業を受けながら、環境という名を冠した授業、農業に関する授業を受けることができました。ただ、開学したばかり、しかも全国で初めての環境科学部は先生方にとっては、試行錯誤でのスタートだったのだと思います。学生であった私達には、先生

方のご苦心のほどはわかりませんが、何とか学生のためになる教育をしようと努力されていることは感じました。

環境科学部の目玉である「環境フィールドワーク」は、座学ではなく、実際に現場に出て、問題を発見し、解決策を考えるというコンセプトが、大変魅力的に感じられました。しかし、実際にこの科目を受けた感想としては、結局何をやっているのかよく分からなかったというのが率直なところです。今振り返って考えてみると、与えられたテーマのなかで、自分たちで問題を発見・理解をすることが思いのほか難しかったように思います。そのため、本当に関心を持って原因や解決策を考えるができなかったのだと思います。ただ、最後にプレゼンテーションしたことについては、自分たちの考えを効果的に伝える大変良いトレーニングになったと思います。

生物資源管理学科の教育については、幅広い分野の講義を受けることができた一方で、専門的に深く勉強すること、特に実験、実習は不十分だったように感じます。

しかし、現在のカリキュラムを見ますと、環境フィールドワークにしても、学科のカリキュラムについても少なからず改善されたように思います。開学から15年が経ち、先生方が御尽力された結果、今

では大変優れた教育システムが出来上がったのではないかと考えています。

さて、現在、私が就いている普及指導員とは、農業改良助長法に基づいて、都道府県に置かれ、直接、農業者と接しながら、実態を把握し、課題解決のため、営農相談や新しい技術の普及を行う仕事です。また、青年農業者の育成、農村女性の社会参画の支援、新規就農者のサポートなども行います。

私は、普及指導員とは環境フィールドワークのような要素が大きい仕事だと思っています。つまり、直接、地域へ出向き、現場を見て、農業者と話をするなかで、問題点を見つけ出し、解決策を提案する、これはまさに、フィールドワーク的だと思うのです。そして、前述した環境フィールドワークにおいて問題点を発見する難しさは、普及指導員についても同じことがいえます。一度や二度、現場で農業者と話したところでの問題点というのはなかなか見えてきません。何度も現場に通うことが大切だと思います。また、現場の問題というのは、作物や栽培技術の他に、その農業者自身の能力や状況、考え方によるものが往々にしてあります。単純に良い作物をたくさん収穫できればよいものではありません。その地域や農業者にとって何がベストなのか考えることが大切です。環境問題においても同じようなことが言える

のではないのでしょうか。自然環境を保つ技術や方法は大切ですが、そこで生活する人にとって幸福とは何かという視点が重要だと思います。

さらに、普及指導員にとってはコミュニケーションとプレゼンテーション能力が大変重要なスキルとなります。一方的に技術や解決策を押し付けても現場は動きません。普及指導員には普段から農業者や関係機関と信頼関係を築き、農業者が納得できる説明をする能力が不可欠です。こういった能力は座学だけではなく、いろいろな経験から身に付くものだと思います。

県大の基本理念は「人が育つ大学」であり、キーワードは「人間」ですが、普及指導員の世界には「普及は人」という言葉があります。このように考えると、県大の教育理念そのものが、普及指導員と共通する部分が多いように感じてなりません。したがって、今の私にとっては、県大で受けた教育が全ての基礎といっても過言でないと思います。

これからの県大には、地域に根ざした教育・研究と同時に、世界を視野に入れた活動を期待しています。小さい大学ですが、世界中から学生や研究者が集まる学術拠点になることを卒業生として願っています。

地域の博物館と環境科学部

生物資源管理学科 第4期卒業生
金尾 滋史

1. はじめに

私は現在、彦根市と隣接した多賀町にある多賀町立博物館で生物担当の学芸員として働いています。中学生の時に将来は学芸員になりたいと思ってからはや十数年、実際に学芸員になってみると、大学で過ごした時間は学芸員としての考え方、知識を形成する上で大きな基盤となりました。本稿では学芸員という職業の紹介とその過程での環境科学部の役割について述べてみたいと思います。

2. 博物館の「へえ～!!」なお仕事

さて、博物館の学芸員と書きましたが、普段、学芸員はどのような仕事をしているのでしょうか？現在私が主にやっていることを紹介すると、1. 資料の展示、2. 普及・教育・交流、3. 資料の収集・保存、4. 調査研究、5. 情報の収集と発信、6. 地域のシンク

タンク、7. 博物館の運営・管理・事務と大きく分けて7つの柱があります。小さな規模の博物館ですので、当然すべてが円滑にこなせている訳でもなく、この他にも様々な実務があるのですが、それぞれの柱は様々な場面で連動しています。研究の成果は展示や普及教育の基礎となりますし、博物館の運営として受付カウンターに座っているからこそ来館者の方から大事な資料や情報を入手できるのです。

また、町の博物館は町のお医者さんと同じように、専門分野を問わず、様々な質問や依頼が入ってきます。多岐にわたって広く、そして深い知識が必要とされ、どんな質問・依頼でも柔軟にそして適切に対応できるようにすることも大事な役割となっています。

3. 学芸員の基礎が詰まった環境科学部

かつて自然史系博物館といえば分類学が中心というイメージでしたが、近年では生態学や農学、地域計画やデザイン、教育といった幅広い分野を「広く深く」取り扱うことのできる人材が求められています。それは、前述のように多様な業務の中で博物館

がただ単に専門分野の研究をするだけではなく、広く社会教育機関として地域に関わる必要があるからです。

私の場合、そのような力は大学内の講義のみならず、フィールドワークなどの野外での実習、そしてサークルや地域活動を通じて「自分の眼で見て、様々な人と出会うこと」から養われてきました。まさに「キャンパスは琵琶湖、テキストは人間」という滋賀県立大学のキャッチフレーズそのものです。そのスタイルは多様な視点と武器をもつ「町の学芸員」として、地域の人の力、地域の宝物を引き出す力につながっています。これは他の職種にも当てはまるとは思いますが、学際的かつ地域との関わりを重視する環境科学部のスタイルは学芸員の基礎としてとても合致していました。

4. 大事な「寄り道」と「好奇心」

私は学生時代から現在に至るまで、「水田地帯における魚類の生態と保全」をテーマとして研究を行っています。農業という人の営みの中で成り立ってきた生態系とその現状を調べ、より良い保全を行なうために地域や行政の活動の輪に加わり、政策や街づくり、生態系保全の一助となるよう研究や活動を進めてきました。その過程において多様な視点を持ち、その道を深めていくために、時には大学外での活動を経験し、時には多分野の勉強をしてみる「寄り道」とそれに手を出す「好奇心」が必要であ

ると感じるようになりました。それは学芸員になっても重要な考え方の一つとして位置づけています。

環境科学部の学科、授業、教員の分野構成は他大学以上にユニークであり、学生数も各学科比較的小人数で構成されています。また講義や研究、普段の学生生活などで教員や先輩後輩との学年を超えたつながりの関係を早いうちにつくすることも可能です。それらがあるからこそ「好奇心を持ち、寄り道ができる大学教育」の可能性が秘められており、環境科学部の中でまだまだ開拓、発展ができる部分であると考えられます。このメリットを最大限に活かし、学生が学内外の様々な場面で交流をすることができる教育の充実を期待しています。

5. おわりに

滋賀県立大学と多賀町立博物館は車で約20分という近い距離にあるため、現在でも先生方や学生達が授業やそれぞれの活動で博物館を活用してくださり、博物館活動を助けて頂くこともあります。大学教育の中で社会の接点として、また研究を進めていく上での一助として今後、博物館をおおいに活用してもらい、相互に発展できるように私は学芸員として、また滋賀県立大学の卒業生として努力をしていきたいと思っています。将来は、環境科学部の卒業生と学芸員同士として出会える日がくることを楽しみにしています。

私が学んだ環境科学とその後の企業における研究活動

生物資源管理学科 第7期卒業生
宮角 裕喜

私が大学院を卒業してすでに約3年が経ちますが、滋賀県立大学で身に付けた事は仕事の上でも様々な役立っています。ここでは近況を交えながら環境科学部で受けた教育と現在の私の考え方について紹介していきたいと思います。

私は現在、日産化学工業株式会社の生物科学研究所に勤務し、除草剤の創製研究に携わっています。新規に有機合成された化合物を植物に散布し、その化合物の雑草に対する除草効果や作物に対する薬害程度を観察評価することが主な業務です。その評価

結果を次の合成にフィードバックし、合成と評価の繰り返しによってより優れた化合物を目指していきます。この仕事において求められるのは現場・現物からの確かな情報を読み取る能力ですが、これには大学時代の環境フィールドワークを通じて得た「現場からの学び」が非常に役立っているように思います。もし室内実験等の再現性の高い環境だけしか知らなければ、実際に現場で起こり得る包括的な事象を考える場面に当たっても想像力が働かない人間になっていたかもしれません。幅広い視野で物事を考えることができるようになったのは実際に本物に触れて学ぶ経験を積んできたからこそだと感じています。また、フィールドワークの授業には単なる体験に留まらず、そこから自分たちなりに得た考えをグループでまとめて発表するという一連の作業がありましたが、このような訓練が社会人としてチームで仕事を進める上で大変重要になってきていることを実感しております。フィールドワークは現在も更に

改良を重ねて続けられているかと思いますが、学生たちがより踏み込んだ議論を積極的にできる場になっていくことが必要であると思っています。

ここで私の仕事に関する話に戻りますが、私には入社して間もない頃から関わっているテーマがあります。幸いなことに現在までその内容を膨らませながら研究を進めることができております。企業で研究を続けていくためには、現実的な採算性や実現の可能性などの情報がベースとして不可欠ですが、そのテーマがなぜ面白いのか、研究を続ける意義は何なのかということを含めて周囲を説得し、同意を得ることも求められます。また、農薬の創製には非常に長い時間がかかることから長期的視野が必要とされます。ここでもまた大学で学んだ考え方について助けられています。広い視野を持ち長いタイムスパンで論理的に考え、建設的に解決策を提案・実行するという作業はまさに環境科学に通じるものがあります。私の意見も現在は積極的にテーマに活かされるようになってきて、ますますやりがいを感じつつ仕事に取り組むことができております。改めて言うことでもないのかもしれませんが、大学で環境科学を学ぶことができた事は滋賀県立大学の環境科学部に入った私たちにとって最も有意義なことのひとつであったことに疑いの余地はありません。入学当初から環境科学概論で聞くこと、学ぶことがとても新鮮で面白く、同時に難解でもありましたが印象深いものでした。これからも一番基礎となる大切な授業として滋賀県立大学の名物にしてもらいたいと考えて

います。

そして研究所で研究をするにあたって最も重要な研究に取り組む姿勢や考え方は、やはり大学院まで続けた研究が私の支えになっております。現在企業においても地味に真面目に研究に取り組むことができるのは研究室配属以来しっかりと基礎から教わってきたからこそだと感謝しています。今後もさらに地方の大学には地域の特色を活かした研究が求められるようになるように思います。滋賀県立大学も基礎研究・応用研究のそれぞれでユニークな研究を続けていってほしいと強く思います。

琵琶湖湖畔にキャンパスを構える滋賀県立大学は人を育む環境に大変優れた大学だと卒業してからも思います。しかしながら近隣に大学などは少なく、他の人との繋がり、別の組織の人間との切磋琢磨に関しては4年かそれ以上の大学生活を通じて、まだ一部の学生しか十分に経験できていない弱いところではないかと思っています。大きな意味では学生がどのような大学生活を過ごし、卒業するまでに何を得られたかまで含めて大学が提供する教育だと考えることもできます。学生が大学に求めるものはそれぞれ異なるかもしれませんが、何か大事なものを見つけて一生懸命取り組むことが今の大学生にとって重要なのではないのでしょうか。今後ますます学生が自分たちの可能性を引き伸ばすチャンスに巡り会い、充実した大学生活を送ることができる場になるよう滋賀県立大学の発展を望んでおります。

最終的には、環境科学を最大限発揮する仕事がしたい

生物資源管理学科 第8期卒業生
井上 惇

いつもお世話になっております。

もうじき社会人になり丸4年が経とうとしています。中部国際空港株式会社の井上惇と申します。

職場は名前の通り、愛知県常滑市沖にある人工島、中部国際空港セントレアです。

空港会社は“空港”そのものが資本でして、航空会社、貨物取扱事業者、商業テナントなどからの収益を原資にし、空港施設全体の管理運営を行っています。

例えば空港のチェックインカウンターでは航空会

社のスタッフが発券業務などを行いますが、セントレアではカウンターとシステムは空港会社の資産ですので、航空会社から使用料を徴収しています。

国や自治体管理である他空港とは異なり、自ら収益をあげて公共事業を行う民間(株式会社)空港です。1企業でありながら地元地域とも密接な関わりがあり、海外も含めたあらゆる業界とも関係がありますので、Think も Act も、Global かつ Local の側面を持つ非常に面白い会社です。

大学入学前、私は大学案内パンフレットにて、環境課学部1期生のMさんの紹介記事を読みました。そこでMさんが関西国際空港株式会社でご活躍されている様子を知りました。私にとって空港は、夢や希望があふれる憧れの非日常空間。空港で働くスタッフが輝いてみえる場所です。私も空港に関わる仕事が出来たらいいなと、その時から頭のどこかで思っていました。まさか実現するとは思ってもみ

ませんでした。

内定してから、ある研究室の先生にMさんをご紹介いただき、入社後にもお会いすることができました。入学当時は言わば憧れの先輩でしたが、今は同窓かつ同業界で活躍される心強い先輩です。

入社してから2年間、私は地域共生と環境の部署にいました。

環境部署の社員は自治体からの出向者のみで、いずれは出向元に帰ってしまう方々です。環境に関する知識とノウハウを社内に蓄積するため、“環境がわかるプロパー社員(専属社員)が必要になる”とのことで、運良く私が採用されたようです。

環境ブームの折、“環境の仕事がやりたい”との学生が多々いたようですが、“環境以外にも伸び代があり柔軟に成長していきそうだと感じたのが採用のきっかけだそうです。

フィールドワークなど通して培った、客観的に把握する高い視点と視野、課題クリアのための知識や行動力など、環境科学部の本質みたいなものを感じ取ってくれたのだと、私は捉えています。

中部国際空港セントレアは空港島建設前から当時の新アセス法を先取りし事前調査を行っています。私が入社した開港後はそれらの事後影響評価調査も重要な業務でした。

実際の環境調査は委託するのですが、1企業であるので経済面も考慮しながら、効果的な調査方法を設計・指示するのが私たち事務職の仕事です。ただ単なる学問のための環境調査ではなく、何にための調査なのか、調査結果を使って何をするのかなど、ずっと先までを理解することが重要です。

大学時にある先生がおっしゃった“環境を扱うには理系のバックグラウンドと文系のセンスが必要だ”という言葉が印象に残っているのですが、調査仕様の立案からデータを基に自治体や漁業関係者へ説明

したりするには、まさに“理系のバックグラウンドと文系のセンス”が必要とされる能力でした。

空港島内には、コージェネ発電所やごみ焼却場などもあり1つの街“エアシティ”を形成しています。環境に関わるテーマも、航空機騒音・テレビ電波障害、大気・水質・海流、海洋生物・鳥類、廃棄物、エネルギー、または社内ISO14001活動など幅広く、一通りのことを経験しました。また、入社当時は騒音・電波障害の環境相談の担当となり住民宅に(1人で)お伺いすることも多く、空港の非難を浴びながら人生初の2時間正座したなんてこともあります。一方で“空港事情はよくわかった、地域のためにも共生以上に共栄していこう”など心通じて感動したこともあります。

環境科学部と直接関係する仕事をすることは非常に稀であるところ、ほぼ直結するような仕事に携われたということは、とても幸運なことだと思っています。

しかし、総合職であるため環境部署に在籍しつづけるわけではありません。若い内から様々な見識と可能性を広げるため、現在は営業部署にいます。空港サービスを提供し、(環境対策費などに充てるための)空港運営原資を空港利用客や空港関係会社からいただいています。

今後どのようなキャリアパスを辿るのかは分かりませんが、やはり環境科学部を卒業したからには、最終的には学んだことを最大限発揮するフィールドにいたいと考えています。

最後に、このようなところで恐縮ではございますが、もし中部国際空港セントレアを利用されることがございましたら“ここにも滋賀県立大学の卒業生がいたな”と同窓を懐かしむきっかけになれば幸いです。

末筆ではございますが皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

カンを養うフィールドワーク

生物資源管理学科 第10期卒業生
市来 亮祐

皆さん初めまして、生物資源管理学科10期生の市来亮祐です。在学中は杉浦省三准教授の研究室に在籍し、主に魚類の研究をしていました。卒業後は愛知県庁水産課の技術職員に、現在は職員派遣という形で財団法人愛知県水産業振興基金栽培漁業部に勤めています。

愛知県庁水産課の技術職員ですが、職業としては一般的な地方公務員と同じもので、行政職と待遇等は何なら変わりはありません。では何が違うのかといいますと、技術職は基本的に採用された部局・課室から他の部署への異動は無く、専門的な技術・知識を持ったその分野のスペシャリストとして職務に当たります。私の場合は県庁水産課、地方事務所水産課、愛知県各地の水産試験場が主な職場となります。では実際にどのような業務があるのかというと、まず大きな括りとして、行政と試験研究の二つに分けられます。前者は県庁水産課を中心とした組織で、愛知県の水産に関する行政を司っています。業務は漁業者の調整、水産業の振興、資源の管理から漁港の整備、漁業者向けの金融等々多岐にわたっており、またいわゆる一般的な公務員のイメージに近い仕事です。それに対するのが後者の試験研究で、こちらは水産試験場本場を中心とした組織となっています。業務は文字通り水産関係の試験研究であり、新技術の開発や資源の調査・回復、疾病の原因究明と対処方法など研究しています。こと水産の世界において各県の水産試験場の果たす役割は大きく、民間研究所、大学組織と並んで研究分野における重要な地位にあります。

現在勤めている愛知県水産業振興基金へは、技術指導の一環ということで派遣されています。栽培漁業部は放流を目的とした種苗の生産を行う部署で、生産された種苗は各漁業協同組合に出荷され、県内各地の漁場に放流されます。現在は魚類、甲殻類、貝類の3系統8種を生産しており、私は貝類班としてアワビとナマコの生産に携わっています。高級食材であるアワビは言うに及ばず、ナマコも高級珍味の高級海鼠腸（コノワタ）の原料となるなど重要な水産資源のひとつです。またアワビにおいては再捕獲率

が高く、漁獲量の多くを放流種苗が占めるなど、種苗放流は漁業資源の維持・増大に大きく寄与しています。私は生産業務において、主として餌料の生産供給と維持培養を任されています。例えばアワビの場合、生後しばらくを浮遊幼生として過ごした後、藻類を餌とする底生生活に移ります。このとき必要になる珪藻類、そして補助的に必要となる緑藻類の生産を担当しています。また毎年餌料となる藻類を確実に生産できるよう、単離した珪藻類を維持培養しています。その他日常の業務として、生産水槽や器具の管理・清掃、海水の水質検査・記録などを行っています。

さて、卒業生の立場から振り返って、また研究者あるいは生産者という私自身の職業的な立場から見て環境科学部の教育において優れている点は、やはりフィールドワークを重視し積極的に教育に取り入れている点だと思います。研究や生産育成に携わる上で、観察する力とそれによって得た情報を元に考える力というのは、なくてはならない最も重要な力です。また水産に限らず生物や自然を相手にするというのは、知識だけでなく、時には一種のカンのようなものが必要とされることがあります。私見ではありますが、このカンというものは屋内に籠りきって資料に傾注するのではなく、実際にフィールドに出て観察したり、採取・飼育を続けて経験を積むことによって初めて養うことの出来るものだと思います。フィールドワークを積極的に取り入れることによってそうした力を伸ばすことの出来る点こそ、本学の教育における最も優れた部分であると思います。また、単一の研究分野のみに特化させるのではなく、様々な分野の知識を得られることも良い点だと思います。例えば私の場合、緑藻類の培養では技術の面で手探り的な部分も多く、植物学など水産学以外の知識も役立つことが多々ありました。この辺りは、水産に限らず多方面の知識を得られる本学ならではの利点であったと思います。また多種の知識を持ち多方面の考え方が出来るというのは、物事を多角的に捉え考えられることに繋がります。こうしたところも、本学の優れた部分でしょう。在学中の、そして今後入学される皆さんには自身の興味のある分野のみではなく、広い視点に立って多くの分野の知識を選び好みなく学んでもらえればと思います。本学にて学んだ皆さんがその力を存分に発揮し、各分野の発展に寄与することを期待しています。